

3章-4

メディアとしてのミュージアムとコミュニケーションの可能性

——「シニアのための超おとなワークショップ」

村田麻里子（東京大学大学院学際情報学府博士課程）

塚瀬三重（東京大学大学院学際情報学府修士課程）

三河内彰子（コロンビア大学ティーチャーズカレッジ博士課程）

1. 本プロジェクトの目的

本プロジェクトは、「メディアとしてのミュージアム」の研究の一環をなすものである。具体的には、ミュージアムの資源を活用したメディア・リテラシーのワークショップを、当時東京大学総合研究博物館小石川分館で開催中の「MICROCOS-MOGRAPHIA——マーク・ダイオンの『驚異の部屋』」（以下、「ダイオン展」）を題材にシニアの人々を対象として行なった。あえてミュージアムが今まで目を向けてこなかったシニア層を対象とすることによって、ミュージアムとシニアの間に新たな回路をつくり、ミュージアムというメディアのコミュニケーションの可能性に着目すると同時に、メディア・リテラシーが幅広いテーマや層を取り扱うことで厚みのある実践になりうることを示すことが本プロジェクトの目的である。

2. ミュージアムとシニア

日本では、第一線を退いた高齢者を「社会を退いた」人々とみなす傾向がある。ミュージアムにおいても例外ではない。ミュージアムは、本来だれもが年齢に関係なく訪れ、楽しめるものであるはずだが、よくみると高齢者の積極的な受け入れという視点が抜け落ちている場合が多い。

例えば、最近日本でも子供や親子を対象としたワークショップの開催がふえ、展示室

にも備え付けの子供用ワークシートを用意するなどの工夫がみられるようになった。その目的は、子供たちにミュージアムや展示品への関心や理解を喚起し、より一層楽しいものとするところである。しかし、このような子供たちへの熱心な呼びかけとは裏腹に、高齢者への対応となると、車椅子を置くなどにとどまり、積極的な取り組みはほとんどみられない。これはすなわち、高齢者をミュージアムのメッセージを届ける対象として取り込んでいないことを示すものである。

一方で、東京大学総合研究博物館での継続的な調査からは、ここ数年周辺住民の認知度があがり、リピーターが増加していることなどとあわせて、退職した人々や高齢者の積極的な利用が明らかとなった。今回、あえて高齢者をターゲットとしたのは、高齢者とミュージアムの関係について考えることが、ひいては社会におけるミュージアムの役割を捉えなおすきっかけになると考えたからである。なぜ「パブリック」と銘打ちながら、特定の層とのコミュニケーションしか想定されていないのだろうか。そうしたコミュニケーション・モデルへのアンチテーゼであると同時に、新たなミュージアムと社会の回路作りを目指すなかから、メディアとしてのミュージアムの特性や可能性を考えていく。以下ではワークショップの内容を振り返る。

3. ワークショップの実際

3-1. 前半

当日は63歳から86歳までの11名が集まった。対象者を「シニア層」というあいまいな文言にしたことで、20代や30代からの応募も数名あった。その場合、こちらの企画意図を伝えることで対処したが、それでもなお参加を希望した35歳の女性には特別枠で参加してもらった。

真冬の外出に配慮し、午後から夕刻までの時間帯に設定した。開始30分ほど前から参加者が次々と現れ、初対面同士で談笑しながら開始を待っていた。まずは自分で展示を体験してもらうため、本展示が初めての方には開始までの時間を利用して一通り見学してもらった。

ワークショップの内容は二部構成になっている。前半の一時間ではダイオンの作品を鑑賞しながら彼の作品について考え、残りの一時間で、それを応用して昭和の風景の写真素材とした個人史をコラージュ作品に仕上げる。まず、全員で二階の展示室に行き、学生解説員に案内されながらダイオン展を鑑賞した。

次に、ウォームアップとして、スタッフが事前に準備したダイオン展の展示物の写真の中から、各自興味を持ったものを一点選び、タイトルをつけるという作業を行った。写真を観察して気づいた点を「気になる一品」というワークシートに記入することで、写っているものをよりよく見るためのきっかけをつくるのである。



写真1 展示を鑑賞する



<p>名前 ()</p> <p>気になる一品</p> <p>選んだ写真にタイトルをつけてください。</p> <p>動き出し</p> <p>第一印象：選んだ理由/ポイント</p> <p>この15分見ただけで、 感動した</p>	<p>写真に写っているものをできるだけ詳しく描写してください。</p> <p>写真の明るさ、色、撮影した角度などについて、何か気づいたことはありますか？</p> <p>角が鋭い、丁寧</p> <p>本物はどれぐらいの大きさだと思いますか？</p> <p>10cm</p>
--	---

写真2 興味をもった写真を選び、全員の前で発表。下はワークシート「気になる一品」

チューブでつながったフラスコなどの古びた実験器具の写真を選んだ B さん（男性、68 歳）は、この器具が「重要なデータを多数出したはず」という理由から「老戦士」というタイトルをつけた。詳しい描写を記入する欄には、言葉ではなく絵で表現した。

記入後には、各自選んだ写真を見せながら全員の前で発表した。参加者達は緊張する

こともなく、身振り手振りをつけながら、選んだ写真について感じたこと、見つけたことを積極的に語っていた。Cさん（女性、79歳）は樹脂でできている医学用の乳児糞便模型の写真を選び、確かにこれと同様のものを三、四十年前の五月祭（東京大学本郷キャンパスで行われる学園祭）で見たはずだと語った。実物を見た感想は、意外にも「餡みたいできれい」とのことだった。

次に、選んだ写真を持って、その展示物が実際にはダイオンの展示としてどの部屋に、どのように配置されているのかをあらためて見に行ってもらった。一階の作業室から二階の展示室への移動は3名のスタッフが付き添い、複数の部屋にわたって多数ある展示物の中から、選んだ写真の中の実物を一緒に探した。ここでもワークシートを用意し、選んだ写真の展示物のあった場所、それが予想と違ってどのような様子、大きさだったか、また、同じ部屋で他に印象的だったのは何かについて記入してもらった。

Dさん（女性、80歳）は昔よく見たものだから懐かしいと言って昆虫のスケッチの写真を選び、「動き出しそう」というタイトルをつけていた。小さい頃これに似た虫を手のひらにのせてよく見ていたものだ、と思い出を皆に語りながらいとおしそうに写真を眺めていたが、その後ダイオンの展示で実物を確認し、顔よりも大きいかというくらいの虫のスケッチの大きさに目を丸くしていた。実際に展示を見てきた参加者達は、「思ったよりも実際の展示物は大きかった」、「思ったよりコンパクトだった」などとグループ内で報告し、写真から受ける印象と、実物との大きさや色、雰囲気の違いに改めて驚かされたようだった。

ダイオンの視点で構成された3次元の作品を写真という2次元メディアで切り取ることで、そこにはまった別の意味が付与される。写真を撮るもの、見るものによって、それは再構成されているという発見に参加者は戸惑いつつも、関心を覚えたようだった。実は、コラージュ作品をつくるということは、展示を自分の視点で再構成し、再評価するプロセスを体験することに他ならない。参加者はこれまでの過程でダイオンの思考を追体験し、それをステップに、次のコラージュをつくることになる。美術専門画集を用いてコラージュ作品をいくつか紹介したことで、「コラージュ」というあまりなじみがないと思われるものも抵抗なく受け入れてもらえた。グループで作品をつくり全員の前で発表した。あるグループは「理性と規矩」の部屋の写真を担当し、古くとも美しい精密な機器を斜めの直線上に並べ、まだまだ力強く動くさまを表した。

ここまでの作業で参加者達は互いに積極的に意見交換をするようになり、休憩時にはこちらで用意した軽食を前にして、活発な会話や笑い声を聞くことができた。比較的短時間で思い出話や共通の興味の話に花が咲き、活発に意見が交わされていく様子は、長い社会生活を経て豊かな人生経験を持つ今回のワークショップの参加者ならではの雰囲気であった。

3-2. 後半

後半では、こちらで用意した昭和の風景の写真（1グループ約百枚、2種類あり）と、任意で持参してもらった思い出の写真を用いてもらった。写真を通じて思いを語るという自分史コラージュ作りの準備段階として、まず、それらの写真の中から一枚を選び、その写真から思い出される出来事、感情などについてグループ内で話し合い、共有した。

今回、スタッフ側で素材として昭和の写真を選んだのは、参加者の年齢層を考えると、昭和の時代の代表的な風景には思いが入りやすいだろうと考えたからである。おのずと太平洋戦争関連の写真も多くなるが、参加者たちの戦争や昭和に対する反応が一様でないことは、我々スタッフにとって新鮮であった。「つらい思い出なのであまり思い出したくない」と主に自分で持参した写真を使う女性もいた一方で、一升瓶に入れた米をつく人の写真を選び「こんなふうにも自分もやっていた」と積極的にスタッフに思い出を話し始める参加者もいた。さらにある人は、玄米を精米するこの作業を振り返り、「でも今は健康のために敢えて玄米を食べているのよ」とおかしそうに笑った。このように写



写真3・4 自分史コラージュ作りの準備。写真を選び、グループ内で話し合う。

真を選び出す過程で多くの思い出が語られ、共有され、参加者たちが自分の歴史を再構成、再評価するきっかけとなった。

ここに至るまでにすでに予定時間はオーバーしていたが、参加者達はその後も熱心にコラージュ制作を続け、写真を好きな形に切ったり、配置を考えたりして、台紙に貼るという作業を根気よく行っていた。Eさん（男性、75歳）は自分で用意した子どもの頃や結婚式の時の写真と、東京裁判や軍事教練の写真とを組み合わせ貼り、「自分は誰だ!」というタイトルの作品を作った。また、元歯科医のFさん（女性、81歳）は自分の子供の写真や趣味の切り布の作品の写真と、戦後間もない時代に子どもたちがいっせいに歯磨きをしている写真、皇室の結婚式の写真などを選んでコラージュを作った。

作業終了後は、作者それぞれの解説つきで全体発表を行った。多くの写真の中からなぜこの写真を選び、この配置に貼ったことにどのような意味を込めているのかについて、個人の思い出とともに語ってもらった。予定していた時間よりも1時間もオーバーする内容となったが、参加者達は最後まで熱心に作業に取り組み、作品を完成させることの楽しみ、またその作品を通じて語ることの喜びを味わっていたようだった。最後にアンケートを行った結果、子供と老人、または外国の人とかと、このような作業を混えてやってみたい、「こんな機会が私の老化を防いでくれました」、という意見のほか、ワークショップという言葉や、チラシに書かれた文言が難解だったなどの指摘も受け、今後の課題も提示された。

4. まとめ

「シニアのための超おとなワークショップ」が依拠したダイオンの展示は、東京大学に120年の歳月をこえて蓄積されている学術標本を独自の視点で再評価、再構成する試みといえる。芸術家の視点から、大学の研究者が研究を目的として収集したモノを今日の社会的、文化的な文脈の中で芸術作品として再構成し、現代社会に提示している。ダイオンの手法に習い、自らの記憶をひとつの作品として組み立て表現する中で、参加者が個人的な記憶と背景にある時代の記録を今日新たに編み直した。このように、ミュージアムにおけるメディア・リテラシーのワークショップは、メディア・リテラシーをより包括的な観点からとらえなおすことを可能にすると同時に、ミュージアム自体もまたメディアであることを提起している。また、こうしたワークショップがシニア層を対象としていることの多義性は、今後プロジェクトを推進していくなかでより深めていく価値がある。

[塚瀬三重・三河内彰子・村田麻里子「活動報告：求ム！熟シタ想像力！-シニアのための超おとなワークショップを振り返る-」『ウロボロス東京大学総合研究博物館ニュース』Vol.9 No.1、2004年4月を改訂]